

日本きのこ学会第22回大会開催記

利用部 微生物グループ 宜寿次 盛生

1. はじめに

2018年9月に函館市で開催された「日本きのこ学会第22回大会」¹⁾ (以下、「本大会」) に実行委員として携わる機会を得ました。本記事では「学会」やその「大会」の準備など、それらの舞台裏にも少し触れながら紹介します。

ところで「学会」とは何でしょう？ Wikipedia²⁾ では「学会（がっかい）とは、学問や研究の従事者らが、自己の研究成果を公開発表し、その科学的妥当性をオープンな場で検討論議する場である。また同時に、査読、研究発表会、講演会、学会誌、学術論文誌などの研究成果の発表の場を提供する業務や、研究者同士の交流などの役目も果たす機関でもある」とあります。私なりに要約すると、ある研究分野の人々が集まって、研究の向上や発展のために情報交換などの交流を行う場が、その研究分野の「学会」と理解しています。

2014年11月現在、日本には1,176もの学会が存在しています³⁾。そして、林産試験場（以下「林産試」）の研究職員（60名）が所属している学会⁴⁾も、「一般社団法人 日本木材学会」（会員数約1,700名⁵⁾、うち林産試職員47名、以下「木材学会」）、「公益社団法人日本木材加工技術協会」（会員数約600名⁶⁾、うち林産試職員20名、以下「加工協」）、「一般社団法人 日本建築学会」（会員数約34,000名⁷⁾、うち林産試職員13名、以下「建築学会」）など様々で、各職員が自らの研究分野等から判断して複数の学会に所属する場合も多々あります。

私が所属する「日本きのこ学会」⁸⁾ (以下、「きのこ学会」) は、「きのこに関する学理とその応用技術について（中略）、きのこの科学技術に関する研究の普及を図り、わが国の学術と関連産業の発展に寄与すること」を目的としています。1989年に前身である「きのこ技術集談会」が発足し、その後、1997年に「日本応用きのこ学会」、そして2004年に「日本きのこ学会」と改称して、現在、会員数約350名の「日本学術会議」から指定を受けた「協力学術研究団体」¹⁰⁾です。関連産業の発展に寄与するという目的から、大学の教員だけでなく、企業（産業界）や公設試験研究機関（公設試）の職員が多く所属しているのが特徴です。詳細は後記しますが、本

大会への参加者（事前申込者）の所属は企業59名、公設試50名、大学教員と学生56名でした。

2. 学会には「大会」がある

前記のWikipedia²⁾には「学会とは、研究成果を公開発表し、その科学的妥当性をオープンな場で検討論議する場」とあります。また、「学会発表」は、「学問や研究の従事者が、方法論を明らかにし、それをを用いた成果の事実およびその進歩性を、学会の全国大会などで口頭発表する形をとる」とあります。このように学会では通常、年一回あるいは複数回、会員が研究発表を行う全国大会（以下「大会」）を開催します。

きのこ学会の大会は、年に一度、最近は9月頃で開催されています。通常、学会ごとに大会の開催時期はほぼ決まっております。木材学会は3月、加工協は9～11月、建築学会は9月に大会が行われています。また、各学会の大会会場は、高校野球の甲子園球場のように決まった場所ではなく、毎年異なる場所で行われることが多いのですが、国民体育大会（国体）のように全都道府県で順番に開催するのはさすがに難しいようです。きのこ学会の場合、本大会の参加者（事前申込者）が北海道から沖縄県までの各地から集ってきた（表1）ことから分かるように、全国に会員がいます。そのため、これまで全国様々な場所で大会が行われ（表2）、地元の会員が「大会実行委員会」を組織して、学会本部（会長ほか担当理事）の協力を得ながら企画・運営してきました。

医学系や規模の大きな学会の場合、大会運営の一部あるいはほとんどを旅行代理店など業者に委託することがあります。木材学会の大会を受託した業者に本大会の見積りをもらいましたが、本大会の規模が小さいため採算が合わず、残念ながらあきらめざるを得ませんでした。

3. 2回目の北海道大会

2017年6月末に、本大会の実行委員長（以下「実行委員長」）から道総研・森林研究本部に対して、「2018年きのこ学会大会が北海道で開催予定であることと大会への協力要請」の打診があり、その後7月末に私たち該当する研究職員へ情報提供がありまし

表1 日本きのこ学会第22回大会参加申込者数

北海道	12	新潟	8	鳥取	10
青森	2	富山	1	島根	0
岩手	2	石川	1	岡山	1
宮城	7	福井	0	広島	1
秋田	2	山梨	3	山口	0
山形	2	長野	15	徳島	2
福島	1	岐阜	2	香川	0
茨城	9	静岡	0	愛媛	0
栃木	14	愛知	2	高知	0
群馬	5	三重	5	福岡	7
埼玉	0	滋賀	1	佐賀	0
千葉	2	京都	6	長崎	0
東京	8	大阪	5	熊本	2
神奈川	5	兵庫	4	大分	2
		奈良	8	宮崎	1
		和歌山	0	鹿児島	2
				沖縄	2
合計		162			

所属機関が所在する都道府県別に集計

表2 日本きのこ学会大会を開催した都道府県⁸⁾

開催地	開催年
北海道	2007(第11回) 2018(第22回)
秋田	2006(第10回)
福島	1992(技第4回)
茨城	1999(第3回) 2015(第19回)
群馬	2003(第7回)
東京	1994(技第6回) 1996(技第8回) 2010(第14回) 2012(第16回)
新潟	1998(第2回)
長野	1989(技第2回) 2011(第15回)
静岡	2016(第20回)
京都	2001(第5回) 2014(第18回)
大阪	1989(技第1回)
兵庫	2009(第13回)
奈良	1995(技第7回) 2004(第8回)
鳥取	2002(第6回)
広島	1991(技第3回) 2000(第4回) 2005(第9回) 2013(第17回)
福岡	1993(技第5回) 2008(第12回)
大分	1997(第1回)

「技」は「きのこ技術集談会」での大会通算回数、無印は「日本応用きのこ学会」(2003年第7回大会まで)と「日本きのこ学会」(2004年第8回大会以降)での大会通算回数を示す。

た。開催まで1年余りしかないと、早急に日程を決めて会場を押さえないければなりません。とりあえず正式な実行委員会発足に先立ち、実行委員長と北海道大学(以下「北大」)の関係者、および林産試の研究職員で準備を始めました。通常、きのこ学会大会の日程は9月第1週目の木曜～金曜日に行っていますが、北大の学内行事と重なるため、第2週の2018年9月13～14日に決めました。実は、この日程変更が結果的に9月6日に起きた胆振東部地震の直撃を避けて、翌週に本大会を実施できることにつながりました。

一方、会場については、岩見沢市か札幌市を候補地として検討を進めました。しかし、結論に至らないまま、2017年のきのこ学会第21回大会(9月6～7日、宮崎市)の会場で、参加した2018年実行委員に決めてもらうことになりました。ところが大会に参加しなかった私に届いたメールは想定外の結論でした。「会場は“函館市”に決まりました。(大会中に行われた)総会で発表しました」とのことでした。

4. 大会の告知

大会の実施内容については、適切な時期に全会員に周知する必要があります。きのこ学会では、年4回発行している「日本きのこ学会誌」(以下「学会誌」)やHP上で「会告」という形で告知します。

「第1回会告」までに、大まかな日程や参加申し込み、発表申し込みなどの大会概要を確定しなければいけません。まず、大会実行委員会事務局の窓口として北大に受付専用のメールアドレスを作成してもらいました。併せて、大会実行委員候補のメンバーと学会本部の担当理事を含めたメーリングリスト(以下、「ML」)を起ち上げて4月から運用を開始しました。そして、可能な項目は前年度にならって行い、「発表申込」や「参加申込」の締め切り日時や「公開シンポジウム」の講演者および講演内容を決めて4月中旬には原稿を学会本部に提出しました。

5. 研究発表申込受付

前記Wikipedia²⁾には、「発表時間は学会によって異なるが、概して20分-30分程度と短く、発表者は内容を整理して発表することが求められる。発表後には質問時間が設けられ、聴衆の会員から発表内容に関する質問を受け付けるのが普通である。(中略)また、発表定員の関係などで、大会会場内の教室・掲示板に研究内容を掲示し、指定時間に発表者がそこで質問等を受け付けることもある。これをポスター発表といい、学会発表と同格に扱われる」とあ

ります。

本大会でも「口頭発表」と「ポスター発表」を設け、口頭発表は質疑応答の時間を含めて15分としました。きのこ学会では以前から「優秀ポスター賞」を設けています。しかし、発表者数の動向は予想できず、効果の検証もできていないと思います。一方で、若手研究者育成の観点から、学生会員の口頭発表が評価の対象となる「学生優秀発表賞」や「高校生による発表」（口頭発表またはポスター発表）も設けています。なお、残念ながら高校生の発表申し込みはありませんでした。

第1回会告が掲載されると、早速6月中旬から参加申し込みや発表申し込みのメールが送られてきました。参加申込者数の推移を図1に示しました。予想はしていましたが、全発表申し込み数の45%（37件/82件）が発表申込締め切り日の7月6日に集中しました。ところで、締め切り日以降も発表者数が少し増加しています。これは、申し込みのシステムが分かりにくかったようで、締め切り日以降も確認作業が続いたためです。

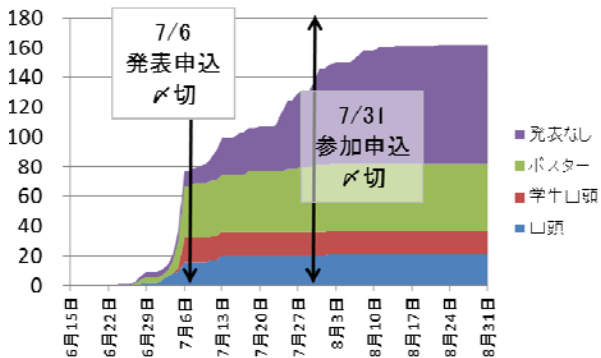


図1 日本きのこ学会第22回大会参加申込者数の推移(累積)

6. プログラムの編成

発表申込の締め切り後は、速やかに発表プログラムの作成に取りかかり、実行委員会全体で編成を行いました。

通常、大会での口頭発表は、複数の会場で同時に進められ、研究部門ごとにひとつの会場に集めてまとまった時間帯に行います。規模が大きい木材学会の場合は10会場に21部門を割り振っています¹⁾。小規模なきのこ学会では、事前に部門分けは行わず2会場で行っています。また、前記した「学生優秀発表賞」を審査する関係上、学生の発表は同じ会場で行いたいと学会本部から強い意向がありました。そのため、一般口頭発表と学生口頭発表を別会場とした上で、それぞれ大まかに部門（栽培、DNA、菌根菌、

機能性など）分けし、各部門が両会場で同じ時間帯に重ならないようプログラムを組みました。大会では口頭発表の司会は「座長」と呼ばれる同じ研究分野の会員が行います。自分の発表後、次発表者の座長を行うように順次交代する方法もありますが、きのこ学会では、発表2～4題ごとの座長を事前に依頼して進行してもらいます。

また、本大会のポスター発表は、会場のスペースやパネルの数に余裕があり、参加者が密集しポスターが読みにくくなる懸念はほとんどありませんが、当日の議論が行いやすいように大まかに部門ごとに配置しました。

7. 講演要旨集の編集作業

一般的に学会の大会では、全ての研究発表の概要（要旨）をまとめた冊子「講演要旨集」（以下、「要旨集」）を作成し参加者に配付します。木材学会のように規模の大きな大会では、要旨集を冊子体からWeb版へ変更する傾向にあります。パスワードでデータを管理し、参加者各自が必要に応じてダウンロードする、または有償でCD版を提供するようにしています¹⁾。大会終了後には要旨集をWeb上で一般公開することも多いようです。

本大会では冊子体の要旨集を作成しました。要旨集の一部、すなわち発表プログラムや会場地図とアクセスマップ、諸注意などは第2回会告の原稿と重なるため、原稿作成は分担してほぼ同時進行で進めました。

7月下旬に第2回会告の原稿を学会本部に提出し、8月上旬にHPに掲載されました。

一方、要旨集の編集作業は、発表者が提出した各要旨のデータファイルを発表プログラムの順番に並べ替え、発表番号を付して編集します。最後に企業の広告原稿を加えて、お盆前に印刷業者へ入稿しました。

8. おわりに

本大会ではこのほか、大会会場や懇親会の段取り、公開シンポジウム、広告・協賛・後援等大会運営経費の調達などの業務もありました。

そして大会直前の9月6日未明に胆振東部地震が発生し、その後は道内全域停電（ブラックアウト）となりました。9月12日にはじめて大会会場入りし、会場設営や大会の運営などをこなし、もちろん多くの研究発表を聴講し意見交換に参加しました。このように本大会は、参加予定者が1名取りやめたものの、

災害の影響もなく無事に終了しました(図2)。

前記したように、この第22回大会以前に第11回大会が2007年に旭川で開催されています。この流れから推測すると次回の北海道開催は、2029年第33回大会になるのでしょうか?そのころ私は残念ながら現役引退(定年退職)しているはずです。

ところで来月2019年3月14~16日には、同じ会場(函館アリーナ)で「第69回日本木材学会大会」が開催されます¹²⁾。林産試からも多くの方がスタッフとして参加します。公開シンポジウムも予定されているので、機会があれば是非ご参加下さい。

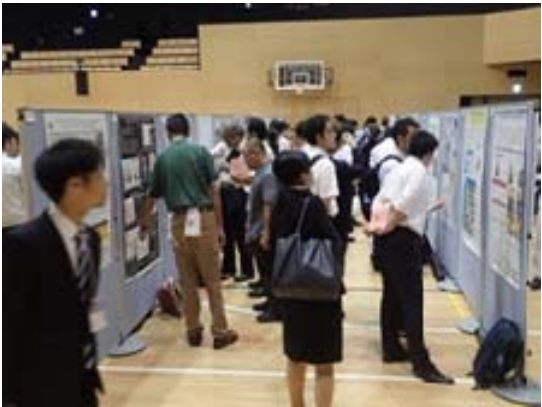
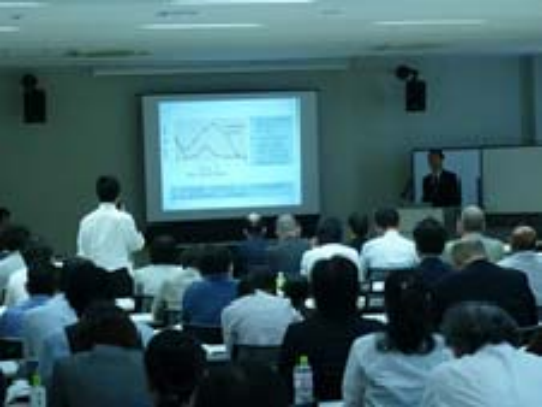


図2 日本きのこ学会第22回大会の様子
上および中：口頭発表会場，下：ポスター発表会場

9. 参考資料

- 1) 日本きのこ学会：年次大会情報，
http://www.jsmsb.jp/next_meeting/ 2019年1月9日参照。
- 2) ウィキメディア財団：フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』，学会，
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AD%A6%E4%BC%9A> 2019年1月9日参照。
- 3) ウィキメディア財団：フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』，日本の学会一覧，
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AE%E5%AD%A6%E4%BC%9A%E4%B8%80%E8%A6%A7> 2019年1月9日参照。
- 4) 北海道立総合研究機構：研究職員データベース，
<https://www.hro.or.jp/research/database.html> 2018年12月28日参照。
- 5) 日本学術会議，日本学術協力財団：学会名鑑，機関詳細-日本木材学会，
<https://gakkai.jst.go.jp/gakkai/detail/?id=G00416> 2019年1月9日参照。
- 6) 日本学術会議，日本学術協力財団：学会名鑑，機関詳細-日本木材加工技術協会，
<https://gakkai.jst.go.jp/gakkai/detail/?id=G00214> 2019年1月9日参照。
- 7) 日本学術会議，日本学術協力財団：学会名鑑，機関詳細-日本建築学会，
<https://gakkai.jst.go.jp/gakkai/detail/?id=G00013> 2019年1月9日参照。
- 8) 日本きのこ学会：<http://www.jsmsb.jp/> 2019年1月9日参照。
- 9) 日本学術会議，日本学術協力財団：学会名鑑，機関詳細-日本きのこ学会，
<https://gakkai.jst.go.jp/gakkai/detail/?id=G01769> 2019年1月9日参照。
- 10) ウィキメディア財団：フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』，日本学術会議協力学術研究団体，
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E5%AD%A6%E8%A1%93%E4%BC%9A%E8%AD%B0%E5%8D%94%E5%8A%9B%E5%AD%A6%E8%A1%93%E7%A0%94%E7%A9%B6%E5%9B%A3%E4%BD%93> 2019年1月9日参照。
- 11) 日本木材学会：第68回日本木材学会大会(京都大会)，
<http://www.jwrs.org/wood2018/info.html#issue> 2019年1月9日参照。
- 12) 日本木材学会：第69回日本木材学会大会(函館大会)，
<http://www.jwrs.org/wood2019/> 2019年1月9日参照。